

来年度は、大阪府の北方の兵庫県および京都府でのニホンザル生息の実態調査を行い、できれば箕面集団との間の分布状況を明らかにしたい。

全国規模のニホンザル生息個体数推定法の検討

羽柴克子（東京大学医科学研究所）

ニホンザルの全国個体数推定法の検討は、理論を呈示（植生・生息密度仮説から推定式を作成）し、その仮説に基づいて推定数を算出し、次に実態の中で検証（推定値を落葉広葉樹地域では34%、常緑広葉樹で17%に修正した。）するという、科学的基本的方法で進めてきた。即ち、検証対象を全国均一の測定可能な数量に変換すること、検証過程で新因子等の検出や新たな調査地域結果の比較を行い、推定式の修正等を繰り返し、真の値に近づけていくことなどである。

本年は、基礎資料となった第2回緑の国勢調査の歴史的変遷のデータと、村別に点としてプロットした長谷部の資料（1974）をメッシュ図に作り直して、比較検討した。しかし、地図上に示されたひとつの丸は、生息と記されている村名の上にドットでプロットされたため、緑の国勢調査との比較が困難であった。そこで、長谷部の資料の山林地域をメッシュ図で表わした天笠ら（1978）の図を用いて、緑の国勢調査の生息有区画（Mと略）と長谷部の生息有区画（Hと略）のメッシュ図を同一地図上に重ね合わせ、重なった区画数と重ならなかった区画数を比較した。Hのみ生息有とされる区画は絶滅地域とも考えられるが、Mの絶滅区画とは一部の地域のみ重なり、ほとんど生息情報無し区画であった。2資料のメッシュ図が重なった区画数とMのみの区画数を比較すると、近畿、四国以外はほとんどMのみの区画数のほうが多かった。次に、緑の国勢調査による昭和20年代以前と30年代以後の生息区画とHの異同を比較した。昭和20年代以前のMとHの一致した区画数が、30年代以後の一致した区画数より多く、且つ20年代以前のMのみの区画数が30年代以後のMのみの区画数より少ない県は、42県中19県であった。20年代以前のMとHの重なる区画、重ならない区画が共に30年代より多い県は15県であった。即ち、全国的にみると、HとMが重なった区画の80%は、昭和20年代までのMとはほぼ一致した。このことから、昭和20年代以前までのMの区画は、

Hの分布域をおおっているが、30年代以後Hの分布からはみ出したと考えられる。

今後、より詳細に両資料の比較検討を行なうと共に、昭和30年代からの拡大原因を検討する予定である。

中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態

上田 丞・林 勝治（宇部短期大学）
田中 浩（大津高校）
村田 満（三田尻女子高校）

今回はアンケート法により島根県の野生ニホンザルの群れ（10頭以上の集団）、小集団（2～9頭の集団）とソリタリーの分布についての調査をした。また山口県内で、アンケート法による調査の検討と群れ数の把握の試みおよび絶滅群の絶滅経過の調査をしてきた。結果および今後の調査要点は次の通りである。

アンケートの結果：島根県で群れが集中していたのは3ヶ所であった。複数の群れが集中している地域を「群れ集中地域」とする。

山口県の調査結果と同じく、島根県においても、小集団およびソリタリーの分布は群れ集中地域外にも広がっていた。

アンケートの検討：山口県阿武郡阿東町の蔵目喜地区に複数の群れが生息していたにもかかわらず、回答者は、この地域のサルにかんする情報を入手していなかった。情報を入手出来なかった原因についての調査も行った。

群れ数の把握の試み：高校生13名が3年間クラブ活動として取り組み、聞き込みと現地調査により、山口県玖珂郡周辺で錦川の西には8～9群の群れが生息していることが分かった。

絶滅群：山口県長門市の青海島にはかつて島全域に2～4群が生息していた。

まとめ：アンケートの内容や回答者の選択等について検討するとともに、アンケート法で得られる資料の有効性と限界についての分析をしておく必要がある。

アンケート法で得られた群れ集中地域を対象に、現地の人たちに協力を呼びかけ、尚絅大学の「藤井尚教方式」で群れ数および個体数を把握していく準備をしている。行動域については山口県玖珂郡周辺で今までに行ったようなきめの細かい聞き込みと現地調査が必要で、継続的に行う方法

を検討しなければいけない。

熊本県における野生ニホンザルの分布調査

——未確認地を中心に——

藤井 尚教（尚絅大学）

1982年以來の調査で、川辺川流域と阿蘇南外輪山一帯の野生ニホンザル集団の分布がほぼ解明できたので、未確認地域として残っている①芦北郡芦北町、②鹿児島県境（水俣市～人吉市）、③、宮崎県境（人吉市～水上村）の3地域において、生息調査を行った。なお、集団の存在がすでに確認されているのは、③宮崎県境のなかの錦町大平を中心に生息する太平グループのみであった。

調査期間は1989年7月から1990年1月までで、1か月に1回、2泊3日の調査を、1地域につき2回行った。

調査結果 ①芦北郡芦北町：町内の吉尾地区の北側の松山に戦後までサル集団がいて、よく鳴き叫んでいたが、松山が伐採された後、姿が見えなくなったとの情報を得ることができた。しかし現在では、サル集団の生息情報はどこにも存在せず、ハナレザルの情報しかない。

②鹿児島県境（水俣市～人吉市）：水俣市久木野地区及び人吉市久七峠の調査を行ったが、ハナレザル情報しか得られなかった。これらの地区では、針葉樹林化が進んでいて、集団が生息している可能性は低いと思われる。

③宮崎県境（人吉市～水上村）：人吉市から、上村白髪岳、多良木町槻木、水上村市房山と江代山の調査を行った。上村白髪岳から以東の水上村まではサル集団が生息するという情報はなく、すべてハナレザルの噂だけであった。

一方、白髪岳以西においては人吉市からえびの市に抜ける国道221号線沿いの人吉市芝笠地区に1988年からサル集団が現れて、猿害を引き起こしていることを確認できた。さらに芝笠においてこの集団の一部をVTRに録画することができ、個体数を約30頭と推定した。

ところが、1989年11月16日15時30分にこのグループが人吉市上小川内谷で発見された時、その30分前にそこから約6km離れた錦町曲がり谷でもうひとつの集団が確認されていたのである。この後者の集団は先述の大平グループであるが、新しく発見された前者をここで段塔グループと命名してお

く。今後段塔グループによる猿害がどのように推移するかが問題である。

ニホンザルの分布と個体数と生息環境

水野昭憲（石川県白山自然保護センター）

白山地域は、霊長類の分布地としては、きわだった多雪地といえる。ニホンザルが遊動する標高400mから800mでも、最深積雪2mから5mになり、積雪期間は約5か月に及ぶ。この雪が、ニホンザルの遊動と個体数変動に大きく影響している。

1) 分布の拡大と被害の発生

長谷部（1923）等によれば、1920年代までは、白山周辺の山麓に広くニホンザルが分布していたことが分かる。その後、焼畑の敵として、また食用や薬用に捕獲され、1950年代には手取川の支流尾添川流域と、庄川の支流尾上郷川流域の多雪地ではほとんど人が入らない地域にだけ残っていた。

1960年頃に、薪炭が売れなくなって、山中で行われていた炭焼と焼畑が急激に衰退した。幅数kmにわたって人とサルの間に緩衝地帯ができていた。動物愛護思想の普及や観光地化により野犬が駆除されたことなどから、サルが村落周辺を恐れなくなった。当地方でも1985年頃から、晩秋に畑作被害が出るようになった。

2) 冬の遊動域の変化

1990年3月まで、手取川流域の野生群、12群について、群れ構成を確認し移動を追跡した。近年、個体数が増加し、冬の遊動域が下流方向へ広がる傾向にある。この冬にはタイコA1群とクロダニ群が手取川を渡り、鳥越村へ移動した。1965年以降現在までに約10kmの低山方面への分布の拡大が見られた。

3) 個体数増加率

白山のニホンザルでは、大雪の年にアカンボウの高い死亡率がみられる。1987年以降、比較的雪の少ない年が続いているので、アカンボウの死亡は少なかった。そのために、長期間の個体数増加率は、過去に報告していたものから大幅に修正することになった。1970年のまとめ（河合ら、1970）以降継続して個体数が追跡できている3群の個体数の合計は、20年で3.3倍になった。

奥地の積雪期間が長いところを遊動する群れよりも、低地へ遊動域を広げている群れのほうが個